

ヤスクニ・レポ 261 処理済み汚染水海洋放出決定 ～フクシマは死ね！！

住吉 英治(日本同盟基督教団・勿来キリスト福音教会牧師)

政府—処理済み汚染水海洋放出決定

この4月13日、自民党・公明党政府は処理済み汚染水(「汚染水を浄化処理した後の放射性物質トリチウムを含む水」東京新聞表記)を海洋放出することを決定した。私にはそれが“フクシマは死ね!!”と言っているように聞こえた。

海洋放出ありき

4月13日の朝日新聞は「本命だった処理水の海洋放出 タンク満杯までの時間稼ぎ」と見出しを付けている。処理済み汚染水の海洋放出は当初から本命視されていた。国と東電は事故から10年間、処分方針への態度を曖昧にし、決断を先延ばしし続けてきた。増設を繰り返してきたタンクの満杯という「時間切れ」が2022年秋以降に迫るなか、海洋放出に踏み切ったと言うことだ。

この作戦は当初からありきだったと言うこと。国も東電もなれ合い、なるべく互いに傷を負わず、責任を負わない形で「タンク容量が迫っているので仕方なく認めて欲しい」と国民と福島県民を脅迫してきたのである。まさに“フクシマは死ね!!”と言ってきたのと同じである。東電は2015年8月、県漁連に対し、「関係者の理解なしには、いかなる処分も行わず・・・処理水は・・・タンクに貯蔵する」と文書で回答していた。政府も東電もあっさりこの約束を反故にしたのである。嘘や偽りを続けてきた東電や、オリンピックを招致するために「福島原発はアンダーコントロールされている」とうそぶいた元安倍首相発言、自民党・公明党政府政策の当然の帰結であろう。

怒れ、福島県民、国民

これほど正面から福島県民、国民が愚弄、馬鹿にされていることがあろうか。“怒れ福島県民、国民よ”である。なめられてたまるか!!言うまでもなく地元県漁連も全国漁連も方針決定について「到底容認できるものではない」と抗議声明を出した。農業・酪農・果樹園経営者等、福島県民しかりである。そのような中、あろう事か内堀雅雄県知事は、「県は海洋放出を容認する、しないという立場に無い」と述べ、賛否を明らかにしなかった。朝日新聞は、「福島県知事、処理水放出にだんまり 県民から不満の声も」と見出しを付けている。どこの知事だろう。たとえ政府と賠償についての裏取引があったとしても、「反対だ!」と啖呵を切って欲しかった。こんなふにゃふにゃな知事は要らない。

責任者の不在

事の重大性は「責任者の不在」、どこに責任があるのか、その所在が限りなく、意図的にぼかされていることである。以下朝日新聞記事より。

「『縦割り』行政の結果、福島原発事故をめぐる国の責任はいったい誰にあるのかもぼやけてしまっている。今回のトリチウム水海洋投棄に関する決定についても同様である。所管は経済産業省になる。しかし、たとえば除染事業の所管は環境省、『原子力安全の強化に貢献する』ための国際会議の開催は外務省、核燃料サイクルの要とされた高速増殖原型炉もんじゅの廃炉の所管は文部科学省、さらに『東日本大震災からの復興に関する施策』(東日本大震災復興基本法)を担うために設置された復興庁、といった具合に、である。当然、地方自治体も

責任を負うだろうが。」

7月6日、原発事故を巡り、東電の株主が旧経営陣5人に22兆円の支払いを求めた訴訟で、当時の社長であった清水正孝氏ら4被告の尋問が東京地裁であった。清水氏らは口を揃え、事故の責任を改めて否定した。「記憶にない」「知らない」を繰り返した。「つどい」の使命はこれら責任の所在を明らかにすることにもある。

「水俣と福島に共通する10の手口」

毎日新聞2012年2月27日夕刊2面に、アイリーン・美緒子・スミスさんが語った「水俣と福島に共通する10の手口」が簡条書きで掲載されている。その「手口」の多くは、今回の海洋投棄を巡る問題にも、すでに当てはまっているのではないだろうか。（以上、朝日新聞記事より）

- ① 誰も責任を取らない縦割り組織を利用する
- ② 被害者や世論を混乱させ、「賛否両論」に持ち込む
- ③ 被害者同士を対立させる

- ④ データを取らない証拠を残さない
- ⑤ ひたすら時間稼ぎをする
- ⑥ 被害を過小評価するような調査をする
- ⑦ 被害者を疲弊させ、あきらめさせる
- ⑧ 認定制度を作り、被害者数を絞り込む
- ⑨ 海外に情報を発信しない
- ⑩ 御用学者を呼び、国際会議を開く

なんと原発事故と賠償問題にピッタリと当てはまることか。アイリーンさんに敬服する。

終わりに

私は来年早々には『福音宣教と原発事故・放射能汚染問題（仮題）』という本を書きたいと願っている。もう一つは、コロナの推移を見守りつつ、東京で『福音宣教・原発・エネルギー問題（仮題）』といった講演討論会を開きたいと願っている。つどいの協力をいただけたら感謝である。最後に、つどいの使命はこの地上に限りなく公義と正義を打ち立てていくことにあるのではないかと思う。

（アモス 5:24 公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。）

2021年11月19日例会奨励「人の子が神の右に」

使徒の働き7章44～60節 柴田智悦牧師（日本同盟基督教団横浜上野町教会）

ステパノは死に直面したとき天を見上げました。そこに、私たちのために十字架を負って勝利されたイエス様が見えました（コロサイ 3:1-3）。

地上の事柄の真の解決は天を見上げることにあります。「人の子が神の右に立っておられる」ことがステパノの現実でした。この時、ステパノは神に向かい「主イエスよ、私の霊をお受けください」と祈ったのでした。まさに、イエス様が十字架で息を引き取られる前に「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と祈られたことを彷彿とさせます（ルカ 24:46）。

主は私たちの命をあらゆる死の危険からお救いくださるのですが、この時は彼が死ぬことが主の御旨だったのです。さらにステパノは、自分に向かって石を投げつけている人たちに向かって「主よ。この罪を彼らに負わせないでください」と祈りました。これもイエス様が十字架の上で「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）と執りなし祈られ

たことを思い起こさせます。このように、ステパノを最後まで支えたのは、イエス様に対する堅い信仰と、十字架上のイエス様のように敵をも愛する愛でした。それが後のパウロにおいて実を結ぶのです（1コリント 15:58、伝道 11:1）。

韓国には戦時中のみならず、初期キリスト教迫害に際しても多くの殉教者が出ました。しかし、彼らは決して無駄に死んだわけではありません。イエス様の十字架の死があったがゆえに、彼らもまた韓国教会の礎の石となったのです（マタイ 21:42）。

主は私たちが目的なしに死なせることは決してなさいません。しかし、殉教そのものに価値があるのではなく、その殉教に意味を与えてくださる主によってその殉教が価値あるものとなり、私たちが勝利者なるキリストの栄光を仰ぎ見ることで、その死に価値があたえられていくのです。そのとき、神の右の座につかれたイエス様が最初の殉教者であるステパノを立ち上がって迎えられたように、私たちをも迎えてくださるのです。